



CONTENTS

- 注目の診療科 4 産婦人科 大石 元先生に聞く
- 注目の部門 1 薬剤部の紹介
- がん看護専門看護師の千葉みゆきさんに聞く

NCGMは2025年4月、国民健康危機管理研究機構「感染症総合サイエンスセンター」として新しくスタートします

2025年の初めに当たり、ごあいさつ申し上げます。

NCGMは4月に国立感染症研究所と統合し、国民健康危機管理研究機構（JIHS、ジース）として新しいスタートを切ります。新機構は「感染症総合サイエンスセンター」として、感染症の研究、情報収集、情報発信、感染症に関わる人材育成などをおこないます。

一方、センター病院の英語名は引き続きNCGMで、日本語では「国立国際医療センター」と名前を若干変更いたしますが、今まで通り平時には高度で安全な総合医療を患者さんに提供いたします。連携登録医の皆様におかれましても引き続き当センターとのさらに強い連携をお願いできましたら幸いです。



病院長
宮崎 英世
みやざき ひでよ

今号のNCGM PRESS は、産婦人科、薬剤部、がん看護専門看護師をご紹介します

今年は寒さが厳しく、インフルエンザ・コロナなどの感染症が蔓延しましたが、NCGMにはまだ重症患者が時に搬送されており気の抜けない日々は続いております。NCGMの活動を紹介するNCGM PRESS15号をお届けします。今号ではまず、患者中心の医療の実践と人材育成に力を入れる産婦人科からは、その包括的な診療体制と新たに取り組んでいる無痛分娩についてご紹介いただきます。

薬剤部からは、社会的にも大きな問題となっている薬剤の安定的な供給管理に向けた取り組みと薬剤管理指導業務について、がん看護専門看護師からは高い専門性に裏打ちされた患者ケアと患者さんとの交流などの活動が紹介されています。今後ともNCGMをよろしく願いいたします。

副院長
放生 雅章
ほうせい まさあき
広報、総務、診療
教育担当



産婦人科診療科長・第一婦人科医長

大石元



産婦人科が担う多彩な役割と
患者中心の医療を実践する
人材育成に力を入れています

国立国際医療研究センター病院の
産婦人科診療科長・第一婦人科医
長の大石 元先生に産婦人科の役
割と今後の抱負についてを伺った

産科と婦人科の包括的な 診療体制

当センター病院の産婦人科は、
周産期医療、婦人科疾患の治療、
生殖医療・不妊治療の3つの分野
を幅広く手掛けています。産科で
は、NICU医師と密接に連携し
ながら、合併症を抱えた患者さん
の安全な分娩にも尽力していま
す。一方、婦人科では、外科医と
タッグを組み、悪性腫瘍の集学的
治療にも取り組んでいます。

スタッフ体制としては、常勤医
師が15名ほど在籍し、さらに非常
勤医師を含めると20名弱のメン
バーが在籍しています。それぞれ
がサブスペシャリティを有する専



門家として活躍しており、難しい症例には必ず専門医が関与する体制を整えています。産科と婦人科の両分野を包括的に診療し、他科との連携を密に取ることで、幅広い医療ニーズに応えられるのが当院の大きな特徴です。

合併症を抱えた患者さんの受け入れ

他の病院では敬遠されがちな合併症を持つ患者さんの受け入れにも力を入れています。例えば、糖尿病や膠原病、心臓疾患といった合併症を抱えた方の分娩や、血栓症を伴う婦人科疾患の治療にも積極的に取り組んでいます。

そのためには、膠原病内科医、糖尿病・内分泌内科医、循環器内科医、精神科医など、他科の専門家と緊密に連携し、患者さんの状態を総合的に管理する必要があります。お産が危険な方や早産のリスクのある方については、NICU医師とも連携を取り合いながら、安全な周産期医療を提供しています。

先進的な医療技術の導入

一方で、最新の医療技術の導入にも力を入れています。代表的なものが「無痛分娩」の提供です。2

020年から導入し、2024年からは初産婦の方にも無痛分娩を積極的に行っており、大変好評を得ています。

また、ロボット支援下手術の「ダ・ヴィンチシステム」を導入し、これまで総計300件ほどの症例を行っており、大きな子宮筋腫や、複雑な手術歴のある患者さんの治療にも活用しています。低侵襲性の高い手術を提供することで、患者さんの術後の回復も早く、入院期間の短縮にもつながっています。

最新の医療技術を取り入れ、患者さんにとってより良い治療を提供できるよう、日々研鑽を重ねています。



患者中心の医療姿勢の醸成

当産婦人科では、単なる技術習得だけでなく、患者中心の医療姿勢の醸成にも力を入れています。新しく当科に入ってくる専攻医の先生方には、単一の分野に偏ることなく、産科、婦人科、生殖医療の3本柱をバランス良く学んでもらうよう指導しています。

さらに、手術を行う際も、その必要性や意義を十分に検討し、患者さんにとってどのような意味があるのかを常に考えるよう促しています。単に件数を重ねるのではなく、一人ひとりの患者さんのために最適な治療を提供することが何より大切だと考えています。

このような患者中心の温かみのある医療を実践できる人材の育成にも力を入れています。

助産師や看護師との連携が何より大切

特に助産師とは、患者さんのそばにいる存在として、密接に連携しています。出産の場合、助産師がメインで患者さんのケアを行い、我々医師はそれをサポートする立場となります。

また、最近導入したvNOTES手術*など、低侵襲な手術手技に

ついては、手術室の看護師たちとコミュニケーションを密に取りながら、知識の共有と技術の向上に努めています。

助産師や看護師との良好な関係を築きながら、患者さんにとって最適な医療を提供できるように、日々努力しています。



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター病院
院長補佐
産婦人科診療科長・第一婦人科医長

おおいし はじめ
大石 元

東京大学医学部医学科卒業。東京大学医学部附属病院周産母子部助教、三楽病院医長。医学博士
専門：不妊症、腹腔鏡手術、更年期医療、日本産科婦人科学会認定産婦人科専門医、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医、日本女性医学学会認定女性ヘルスケア専門医、日本生殖医学会認定生殖医療専門医

*vNOTES手術：『ブイノーツ手術』と読み、お腹を全く切らない経腔的婦人科腹腔鏡下手術です。従来の手術と比較して、より低侵襲な手法で、婦人科の多くの疾患が対応可能です。

医療の最前線で活躍

——病院薬剤部の役割と取り組み

にしむら
たかひろ
西村 富啓
薬剤部長



当センター病院の薬剤部が、医薬品をとおして、患者さんのために最善を尽くし、病院全体の医療の質向上のために貢献にどう取り組んでいるかを西村部長にお伺いしました

薬の供給管理と 細かな確認作業

何より重要なのは、医薬品を適切に供給することです。昨今の医薬品供給不安の問題は、非常に深刻であり診療自体に影響を及ぼしています。そのような状況を可能な限り回避し、必要な医薬品を確保すること、これは、私たちの根幹となる業務です。その上で、医師の処方に基づき、必要な薬を調剤し、病棟や外来の患者さんへ届けています。ただし、調剤するだけでなく、処方の適正性を確認し必要に応じて医師と相談しながら最適な処方支援を行っていくことも大切です。また、注射薬や抗がん剤などの調製も行っています。こちらはさらに専門的な知識と技術が必要とされる業務で、患者さんの命に直結するため、細心の注意を払って対応しています。

薬の情報提供と薬剤師の 病棟配置・薬剤管理指導 業務の推進

医師等の業務負担や医薬品に関する疑問や不安を軽減するため、全病棟に薬剤師を配置し薬の供給だけでなく、医療スタッフへの情報提供等を行っています。医師や

看護師には、薬の適正使用や医療安全に関する情報などを、患者さんには直接、薬効や服用方法、副作用などについて説明し、安全な薬物治療を支援しています。さらに、検査前に中止すべき薬の確認を通して、検査時のリスク軽減にも尽力しています。病院全体の薬物治療の質を高めるため、正確な情報を適切な場所・ヒトに提供することも私たちの使命です。

院内製剤、適応外・ 未承認薬の取り組み

既存の薬が使用できない場合、私たち薬剤師は、院内製剤、適応外・未承認薬という形で薬を提供することもあります。これは、医師からの要望に対して検討し、しかるべき手続きや委員会を経る必要がありますが、標準的な治療では改善が期待できない患者さんへの薬を提供する重要な取り組みの一つです。通常では経験できない知識や技術を身につけることができ、患者さんのために尽力できる喜びを感じられます。また、そこで得た経験は、他の病院に行っても活かせるはずですよ。

感染症への対応

近年、感染症への対応が重要な



課題となっています。従来から当院の薬剤部は、感染症に強い薬剤師の育成に力を入れています。特に、来年の国立感染症研究所との合併を控え、さらに感染症の治療や予防に関する知識と技術を高め、有事の病院全体での対応にも協力していくことが必須です。直近の話題になりますがMPOxの当院での対応に関しては、ワクチンを含めた医薬品の早期開発のために、薬剤部として情報収集から管理手順書の整備、調製・使用方法の指導等、幅広い協力を行っています。

国際貢献と特殊疾患への取り組み

これに限らず、高齢化社会を見据え、予防医療への貢献も重要な使命だと考えています。

当院の使命として、特殊疾患への対応が挙げられます。他では経験できない症例に取り組むことで、私たち薬剤師も確かな実力を身につけることができます。例えば、海外からの患者さんの治療や、難治性の疾患への対応など、通常の病院では扱わないような症例に取り組む機会が多く、私たちの知識と技術を確実に高めてくれます。そうした知見を外部に発信し情報提供することも大切な役割だ

と考えています。

人材確保・育成と薬剤師レジデント制の実施

これからの課題の二つは、人材確保と育成です。薬剤師不足が深刻な中、優秀な人材をいかに確保し、丁寧に育成していくことが重要です。当院ではレジデント制度がその一躍を担っています。優秀な薬剤師を確保しつつ薬剤師のタスクシフトを進め、真に求められる場所、やりがいのある部門へ薬剤師を配置していきたいと考えています。

また、臨床研究や資格取得の推進、大学との連携を利用した新しい研究への取組等を通して、薬剤師が当院の使命に貢献しつつ専門性を高めることができる魅了ある職場となる事を目指しています。現在、社会人大学院に通いつつ博士号の取得を目指す職員も出てきており、これも薬剤部の実力向上につながることで期待しています。

おわりに

国立国際医療研究センター病院に課せられる医療は、年々専門的かつ高度化されています。我々、薬剤部も、患者さんのために最善を尽くし、当センター全体の医療の向上に貢献していきたいと思えます。

がん看護専門看護師の優しさと情熱

～患者ケアとがん医療のモデルを目指して～

がん看護専門看護師として、患者さんやご家族との丁寧な対話、温かな交流の場づくり、幅広いケアの提供に尽力している千葉さん。がん医療、がん看護の質向上を目指して、組織の中で体制づくりをしていきたいと考えている。

がん看護専門看護師として、私は患者さんやご家族との丁寧な対話を心がけています。がんの治療を受けているみなさまの不安や悩みをうかがい、これからのことを一緒に考えることで、少しでも心の支えになればと願っています。患者さん一人ひとりのニーズに合わせて、幅広いケアを提供することも私の役割です。多職種との連携を密に取り、患者さんが納得の

**患者さんやご家族へ
優しく寄り添うように**

がん看護専門看護師
看護部 副看護師長

ちば
千葉みゆき



いく医療が受けられるよう尽力しています。

患者サロンで温かな交流を

患者サロンの運営にも携わっています。がんの患者さん・ご家族を対象に、治療や栄養、リハビリ、時にはピアサポートなどに関してミニ講演会を開催し、その後に質疑応答や交流の時間を作っています。患者さん同士が話せる場を設けることで、お互いの情報を共有し、支え合うことができます。コロナ禍で一時中断していましたが、

が、最近ようやく再開できるようになってきました。

**患者さんの言葉に
心を動かされて**

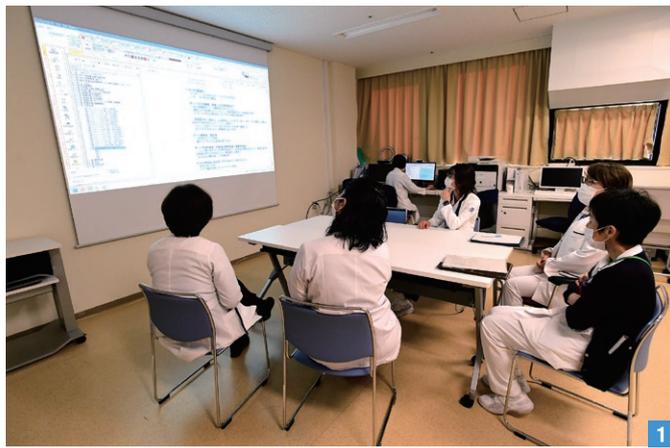
20年程前のことですが、抗がん剤治療中の患者さんが「自分はモルモットだ。これは人体実験だ」と嘆いていたことがありました。患者さん自身も医療者も懸命に治療に取り組んでいるのに、患者さんはそういう思いで生きている。私は看護師になって間もなかったのですが、がん医療には多くの課題があるのだと感じました。時代とともに、がんのイメージも変わってきています。かつては「死の病」と恐れられていましたが、今では「付き合っていく病気」と捉えられるようになってきました。抗がん剤の進歩や症状緩和の工夫により、がん患者さんの生活の質が重視されるようになってきました。がん患者さんが生き抜く過程を支えていきたいです。

**専門性を高め、モデルと
なる病院を目指して**

がん医療の高度化や社会背景の複雑化に伴い、看護師に求められる専門性も日々高まり、治療に関するケアと生活に関するケアの



5



1

1 AYA*支援チームミーティング。他専門看護師、医師、心理士など多職種と情報交換し、支援の方向性を探る 2 4 がん相談支援センター・患者サロンミーティング。活発な意見交換が行われていた 3 患者さんに冊子などを使い、わかりやすく説明する 5 がん患者サロン 6 病棟のスタッフステーションで、病棟看護師との会話。ちょっとした会話から問題点を見出し、改善に努めている

※：15歳～30歳代までの思春期・若年成人をAYA (Adolescent and Young Adult) 世代と呼びます。AYA世代は、就学、就労、妊娠・出産、育児、介護など様々なライフイベントを経験するため、がん治療においても、これらを考慮したサポートが必要です。



3



2



6



4

両面において、高度な知識・技術が必要で、当院の看護師は若手が多く、彼らを丁寧育てていくことが重要です。私自身が実践し、ロールモデルとしての役割を果たしながら、研修会などを通してスタッフ教育に取り組んでいます。

がん看護専門看護師として、組織変革にも取り組んでいきたいです。そのため、私は大学院に進学し、組織変革の手法を学んでいます。自施設のことに加えて、もっと幅広い視点から課題を捉え直し、エビデンスに基づいた解決策を見出していきたいと考えています。当院はがんの専門病院ではなく、総合病院としてがん医療を提供しています。様々な専門性や価値観を持つ人々が集まる中でがん医療の質を高めていくためには、組織全体の体制づくりが不可欠です。総合病院におけるがん医療のモデルとなるようなしくみを目指しています。

がんと向き合う患者さんの姿に、私はいつも勇気をもらっています。治療の過程で落ち込んでも、やがて前を向いて生きていく力を発揮する姿に、人間の強さを感じずにはいられません。そうした患者さんを支えられるよう、私も日々精進していきたいと思っています。

■ 人間ドックセンターのご案内



長い歴史をもつ当人間ドックセンターは、その歴史と経験に基づき、お客様からの安心と信頼をいただいております。その期待にお応えできるよう全スタッフが心を込めてお迎えしております。施設内は広めのフロアでゆったりとしており、スムーズに検査を受けていただけることはもちろん、病院の専門診療科とも常に連携を取っており、ご病気が発見された際には、迅速に専門診療科へご紹介しております。

また当院の特徴として、胃と大腸の内視鏡検査が同日に行えるコースや専門診療科とタイアップしたコース、PET-CT 検査などの様々なオプション検査をご用意しており、皆さまの生活習慣や既往歴などに合わせて、ご自分でご自由にお選びいただけます。日帰りコースだけでなく、ご宿泊コースもご用意しており、お部屋からの夜景やお食事を楽しみながら、時間にゆとりをもって検査をお受けいただけます。



■ ご寄付のお願い ~医学研究の発展と優れた人材の育成のために~



当センターは、センター病院・国府台病院という2つの診療拠点に加え、研究所・臨床研究センター・国際医療協力局および国立看護大学校を擁し、高度総合医療を提供するとともに、特に感染症・免疫疾患ならびに糖尿病・代謝性疾患に関する研究・診療を推進し、これらの疾患や医療の分野における国際協力に関する調査研究および人材育成を総合的に展開しております。

当センターの活動を推進し、使命を十分に果たすためには、その活動財源を安定的・多面的に確保することが必要不可欠です。課せられたミッションを実現して国民の皆さまに成果を還元するための財源に関して、企業や個人の皆さまからの寄附によるご支援をお願いいたします。

何卒、当センターの寄附の趣旨にご理解頂き、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。



ご寄付のお願い



■ 診療時間

- 外来診療時間 8:30 ~ 17:15
- 初診受付 8:30 ~ 11:00

※休診日や完全予約制を設けている診療科もありますので、必ずホームページをご覧ください。



■ 患者支援アプリ導入のご案内

3月26日より、患者支援アプリ「Wellcne (ウェルコネ)」を導入いたします。お手持ちのスマートフォンにインストールし、登録のお手続きをいただくことで、診察待ちの状況や、外来の予約の確認などができるようになります。

- 診察待ち順案内が届きます ○アプリ決済(後払い会計)が可能
- 受診予約が確認できます ○院外処方箋の送信が可能です。
- 医療情報の確認が可能となります。



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター病院

〒162-8655 東京都新宿区戸山1-21-1
TEL 03-3202-7181 (代表)
<https://www.ncgm.go.jp/index.html>

■ 地下鉄をご利用の方

都営地下鉄 大江戸線 若松河田駅(河田口)から徒歩5分
東京メトロ 東西線 早稲田駅(2番出口)から徒歩15分

■ 都営バスをご利用の方

- 新宿駅から(宿74系統) 医療センター経由女子医大行き「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
- 大久保・新大久保から(橋63系統) 新橋行き「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
- 市ヶ谷・新橋から(橋63系統) 小滝橋車庫行き「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
- 都営飯田橋駅前(C1またはC3)から(飯62系統) 牛込柳町駅経由小滝橋車庫行き「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分